

# フェロカクタス

*Ferocactus*

サボテン科 / Cactaceae

荒々しく美しい強刺と、どっしりした樽型のボディ。年を重ねるごとに増す刺の存在感が、コレクターを虜にし続けるサボテンの雄です。

## 概要・魅力

フェロカクタス (*Ferocactus*) は、米国南西部からメキシコにかけての乾燥地に自生するサボテン科の属です。ソノラン砂漠・モハベ砂漠・チワワン砂漠を主な故郷とし、Kew POWOでは現在28種が受理種として認められています (Britton & Rose, 1922年に *The Cactaceae* Vol.3 で確立)。

属名はラテン語 *ferox* (「獷猛な・激しい」) + *cactus* の合成語。名のとおり、肋 (コステ) に沿って密集する**太く大きな刺**がこの属最大の魅力です。刺の色は赤・黄・橙・白と種や個体ごとに異なり、昼夜の温度差が大きい環境ほど発色が鮮やかになるとされます。新刺が出るたびに鮮やかに輝き、年を重ねるごとに増す刺の存在感は他の属にはない迫力があります。

若い株は球形～円筒形ですが、成長とともに**大型の樽型 (バレル型)**になり、一部の種は高さ2mを超えます。和名「バレルカクタス」「樽サボテン」はこの姿に由来し、英語圏では一部の種が**Compass Cactus (方位磁石サボテン)**と呼ばれるほど個性豊かです。花は茎頂部に王冠状に咲き、色は種により黄・赤・ピンクとさまざまです。

フェロカクタスが愛される理由をまとめると次の通りです。

- **刺の造形美** — 太く色鮮やかな刺が放射状に並ぶ姿は圧倒的な存在感。刺の発色が年ごとに変化するコレクション性がある。
- **丈夫で管理しやすい** — 過湿にさえ注意すれば全般に強健。入門種 (王冠竜・日の出丸) は初心者にも向く。
- **実生の楽しみ** — 種から球体が大きくなる過程、刺の発達を長く楽しめる長期育成向きの属。

代表的な種として、幅広の赤い扁平刺が目立つ**日の出丸** (*F. latispinus*)、青緑の肌に黄金刺が映える**王冠竜** (*F. glaucescens*)、赤～橙の強刺が魅力の**鯨頭** (*F. acanthodes*) などが日本でよく流通します。

フェロカクタスの生育は非常にゆっくりです。実生から観賞できる刺が育つまでには数年を要しますが、それを楽しむのがこの属の醍醐味です。

## 基本データ

🌱 成長期	夏型 (盛夏は控えめ)
🌡️ 耐寒温度	0°C前後が目安 (種差あり)
☀️ 日照	直射日光 (強光を好む)
📅 播種適期	春～初夏 (4～6月)
🕒 発芽日数	5～14日
📍 主原産地	米国南西部～メキシコの乾燥地

## 置き場所

フェロカクタスは**直射日光と強光を好む**サボテンです。日照不足は徒長 (間延び) と刺の貧弱化・退色に直結します。刺の色・密度・太さはすべて日照の量と質に左右されるため、置き場所の選択がこの属の栽培で最も重要な要素のひとつです。

### 春～梅雨前 (3～6月前半)

日当たりと風通しのよい**戸外または簡易温室**が理想です。可能な限り直射日光に当て、しっかり光を浴びさせましょう。

### 梅雨～盛夏 (6月後半～8月)

直射日光は引き続き好みますが、日本の夏の**高温多湿と蒸れ**は苦手です。簡易温室で管理する場合は換気・通風を徹底してください。蒸れが続くと**根腐れ**や**カビ**の原因になります。雨が直接当たらない軒下や風通しのよい屋外も有効です。

### 秋 (9～10月)

再び生育が活発になる時期です。引き続き直射日光に当てて育てましょう。昼夜の温度差が大きくなるこの季節は、刺の発色がより鮮やかになりやすい好機です。

### 冬 (11～2月)

最低気温が**5°Cを下回ったら**、日当たりのよい簡易温室か室内の南向き窓辺へ取り込みます。乾燥した状態を保つと低温耐性が向上します。暖房の風が直接当たる場所は避けてください。

**耐寒性**は種によって大きく異なります。王冠竜 (*F. glaucescens*) は園芸情報では-6°Cまで耐えるとされますが、日の出丸 (*F. latispinus*) は0°C前後が目安です。これらの数値は園芸情報に基づくもので、特に多湿な日本の環境では**用土を乾燥**させた状態での管理が前提となります。お手元の種の耐寒性を必ず確認した上で管理してください。

## ○ 水やり

フェロカクタスは過湿が最大の禁忌です。自生地の砂漠では雨が少なく排水性の高い砂礫地に育つため、「用土が完全に乾いてから、鉢底から流れ出るまでたっぷり与える」メリハリ管理が基本です。少量をこまめに与え続けると根腐れの原因になります。

### 春の生育開始（3～4月）

気温の上昇とともに生育を再開します。用土が乾いたら水やりを再開し始めます。まだ寒い日がある場合は控えめに。

### 活発な生育期（5～6月前半）

生育が最も旺盛な時期です。用土が乾いたらたっぷり与えてください。

### 梅雨～盛夏（6月後半～8月）

水やりを控えめにします。梅雨の過湿と蒸れは根腐れに直結します。成体では月1～2回程度に抑えるか、ほぼ断水気味に管理するのが安全です。用土が完全に乾いてから数日待つと与えるくらいのイメージで。

### 秋の生育期（9～10月）

涼しくなるにつれ再び生育が活発になります。用土が乾いたらたっぷり与え、生育を促しましょう。

### 冬の休眠期（11～2月）

ほぼ断水が月1回程度に抑えます。乾燥した状態を保つと低温耐性が向上し、冬越しが安全になります。幼苗は完全断水を避け、月1回程度、天気の良い暖かい日に少量与えます。

## 肥料について

生育期（春～秋）に高カリウム系またはサポテン・多肉専用の化成肥料を春と夏に控えめに与えます。多肥は徒長の原因になるため少量で十分です。冬（休眠期）は施肥しません。

水やりのタイミングに迷ったら「もう数日待つ」が安全です。フェロカクタスは乾燥にとっても強く、与えすぎのほうがか致命的なミスになりやすい植物です。

## 🔗 用土・植替え

フェロカクタスの自生地は砂漠の砂礫・砂利質の痩せ地で、水が溜まる環境に適応していません。排水性を最優先した用土選びが根腐れ予防の基本です。

### 用土の配合例

市販のサポテン・多肉植物用培養土でも育てられますが、排水性をより高めたい場合は次のような配合が栽培者の間で広く使われています。

- シンプルな配合：赤玉土（小粒）＋日向土（または軽石）＝1：1
- より排水性を高めた配合：赤玉土（小粒）3＋日向土3＋軽石（小粒）2＋パーライト2
- 英語圏で多い無機質配合：パミス・パーライト40～50%＋粗砂20～30%＋サポテン用土20%

乾きにくいと感じたら軽石やパーライトの比率を上げて調整してください。有機質が多い用土は過湿になりやすいため、比率は控えめにします。

### 鉢の選択

素焼き鉢は通気・排水性が高く、過湿を防ぎやすいのでフェロカクタスとの相性がよい選択です。受け皿に水を溜めたままにしないよう注意しましょう。

### 植替えの時期と頻度

目安は2～3年に1回です。根詰まりが続くと成長が止まり、刺がポロポロに脱落するなどの障害が出ます。適期については資料によって差がありますが、生育期の入り口（春4～5月）か、夏の生育が落ち着いた秋口（8～9月）がよく挙げられます。どちらも根の活動期に入る前後のタイミングです。

植替え後は数日間水を控え、根を落ち着かせてから通常の水やりを再開します。

フェロカクタスの刺は太く長く、鉤状に曲がる種もあります。植替え時は厚手のグローブや折り畳んだ新聞紙で株を包んで作業すると安全です。大型株の植替えは特に注意を要します。

## 🌱 発芽のさせ方

フェロカクタスは実生（種子からの育成）でも楽しめる属です。発芽そのものは比較的早いですが、その後の生育は非常にゆっくりで、観賞できる刺が育つまでには数年を要します。長期育成を楽しむ気持ちで、まず発芽を成功させることを目標にしましょう。播種の適期は、十分な気温（20～25℃以上）が確保できる春～初夏（4～6月）です。

1. 種子の前処理（消毒・吸水）：殺菌剤（ベンレート1000倍）と活力剤（メネデル100倍）を混合した液に、種子を24時間程度浸漬します。カビ・立枯れの予防が目的です。播種前に用土へ熱湯を回しかけるか電子レンジで殺菌すると、さらに安心です。
2. 用土を用意する：清潔で水はけのよい種まき用土（細粒の赤玉土・パーミキュライト等）を使います。古土の使い回しはカビ・雑菌のリスクがあるため避けましょう。
3. 播種する：前処理した種子が重ならないように、湿らせた用土の表面へバラまきます。
4. 覆土はしない：フェロカクタスを含むチワワン砂漠産サポテン科の種子は好光性である（光条件下で発芽率が高く、暗所では発芽が抑制される）ことが査読論文（Flores et al., *Seed Science Research*, 2006）で示されています。覆土をせず用土表面に置くか、薄くパーライト

や砂をかける程度にとどめます。深植えは発芽不良・蒸れの原因になります。

5. **腰水と高湿度管理**：容器を腰水（受け皿に水を張って底から給水）に置き、蓋付きプラケースや密閉容器で高湿度を保ちます。乾燥すると発芽率が下がります。
6. **温度を管理する**：発芽適温は25～30°Cが目安です。18°Cを下回ると発芽が著しく低下します。室温が低い時期はヒーターマットなどで温度を確保してください。置き場所は強い直射を避けた明るい場所が理想です。
7. **発芽を待つ**：適温・十分な水分があれば5～14日で発芽します（国内の実生記録でも概ねこの範囲です）。Flores et al. (2006) によると発芽の対数相は播種後8～20日の間とされています。カビが見つかったら殺菌剤をスプレーして素早く取り除きます。
8. **発芽後の管理**：発芽後もしばらくは腰水を維持して乾かさないようにします。苗が立ち上がってきたら蓋を少しずつずらして通気を確保し、徐々に外気に慣らします。数日おきに殺菌剤をスプレーしてカビ・立枯れ（ダンピングオフ）を予防します。フェロカクタスの実生は生育がゆっくりなため、初年度の冬は10°C以上を保って成長を続けさせると丈夫に育ちやすくなります。

フェロカクタスの実生は長い旅の始まりです。発芽後の生育は非常にゆっくりで、観賞できる大きさになるまで根気が必要ですが、年ごとに刺が発達していく変化を楽しめるのがこの属の実生ならではの魅力です。

## 病害虫・トラブル

フェロカクタスは過湿にさえ注意すれば比較的強健な属ですが、いくつかのトラブルを知っておくと早期対処ができます。

## 根腐れ（最重要トラブル）

過湿・排水不良・風通し不足が主な原因です。幹が軟化・変色し、押すとぶよぶよと柔らかくなったら根腐れのサインです。水はけのよい用土と「用土が完全に乾いてからたっぷり」の水やり管理が最良の予防です。症状が出たら早急に鉢から抜き、腐った根を切り落として乾燥させてから新しい清潔な用土に植え直します。

## 夏の蒸れ

日本の梅雨～夏の高温多湿は特に注意が必要です。簡易温室では換気・通風の徹底が重要です。蒸れが続くと球体表面にカビが生じたり、根腐れへつなぐことがあります。

## 徒長

日照不足・過水・過肥料で球体が縦長に伸び、刺が貧弱化します。一度徒長した部分は元に戻りません。強光・水を絞る管理で予防します。刺の美しさがこの属最大の魅力なので、日照管理は特に妥協しないようにしましょう。

## カイガラムシ

長く硬い刺の間に潜み込んで発生しやすく、刺があるため除去が困難です。白い綿状の塊で見分けられます。成虫の殻は薬剤が浸透しにくいいため、ブラシで物理除去するか、殺虫剤の希釈液に株ごと浸ける処理が有効です。

## ハダニ

高温乾燥期に発生しやすいです。定期的なシャワー洗浄やこまめな葉水（株全体を濡らす）で予防・対処できます。

## 刺の傷み・脱落

根詰まりやストレス状態では新刺が出にくくなり、既存の刺がポロポロに脱落することがあります。定期的な植替えで予防します。

## 葉焼け（刺焼け）・光順化不足

冬越し後や遮光管理の状態から急に強い直射日光に移すと、球体表皮が日焼けして変色することがあります。徐々に光に慣らす光順化が必要です。

## 幼苗の立枯れ（ダンピングオフ）

実生初期に発生しやすいトラブルです。用土の事前殺菌、殺菌剤スプレーの定期使用、適度な通気で予防できます。カビた種子や倒れた芽は見つけ次第すぐに取り除きます。

多くのトラブルは「水のやりすぎ」「日照不足」「蒸れ」が根本原因です。乾かし気味・強光・風通しよく、の三原則を守ると失敗が大幅に減ります。

## 栽培メモ



フェロカクタスの種子を探す  
QRを読み取る / seedstock.jp